

キリスト教各宗派と日本の避暑地の関わりについて

—「日本聖公会人物史」等による新たなアプローチ—

On the relation between Schools of Christianity and Summer Resorts formed by missionaries in Japan — Another analysis by means of “ Akashibito-tachi; Acts of the Apostles of Japan Episcopal Church ”and other biographies. —

上 田 卓 爾

Takuji UEDA

要約：外国人宣教師による日本国内の避暑地（以下、「避暑地」と略記）形成については、2009年に拙稿¹（以下、「上田2009」と略記）で詳述しているが、そこにはキリスト教各宗派との関わりについての記述は全くなかった。今般、『あかしびとたち—日本聖公会人物史—』²（以下、『あかしびとたち』と略記）を参考にしつつ、「避暑地」に新たなアプローチを試みたところ、従来避暑地としては看過されてきた上高地や日本アルプスにも宣教師、中でも聖公会の関わりが大きいことが判明した。

キーワード：避暑臨時列車、『あかしびとたち』、『外国人ノ財産等ニ関スル調査』

1. はじめに

本稿においては「上田2009」以降の研究の成果を発表することが主眼であるが、まず「避暑」=外国人の風習の模倣であるという従来の学界の風潮を批判しておきたい。

先行研究では、「上田2009」以外に日本語の文献史料に言及したものがないが、すでに平安時代において当時の「避暑」の実態を示す文献がある。例えば、

①12世紀初頭成立の『江談抄』³第二・(四三)「忠文炎暑之時不出仕事」(忠文炎暑のときに出仕せざる事)に、「又云、忠文、秋冬者勤陣直夙夜匪懈、炎暑之時請暇、向宇治別業以避暑為事、或時被髮浴于宇治川云云」(また云ふ。「忠文秋冬は陣の直を勤む。夙夜懈怠せず。炎暑の時は暇を請ひて宇治の別業に向かひ、暑さを避くるをもって事と為す。ある時は、被髮して宇治河に浴みす。」と云々。) ⁴

とあって、藤原忠文(貞観15・873～天曆元・947)が夏季休暇を取って、宇治の別荘で避暑をしていたことが記されている。また、その過ごし方も髪をほどいて宇治河で水浴をしていたというのである。また、

②13世紀初頭成立の宇治拾遺物語⁵序に「世に、宇治大納言物語といふ物あり。此大納言は、隆國といふ人なり。西宮殿の孫、俊賢大納言の第二の男也。年たかうなりては、あつさをわびて、いとまを申て、五月より八月までは、平等院一切経蔵の南の山ぎはに、南泉

房といふところに、こもりゐられけり。さて宇治大納言とは聞えけり。

もとどりをゆひわけて、[をかしげなる姿にて] 蕨をいたにしきて、[すずみはべりて] (後略)]⁶

とあって、大納言源隆国(寛弘元・1004～承保4・1077)がやはり、宇治の別荘で5月～8月に避暑をしていたことが記されている⁷。

さらに、近代の例をあげると、

③明治17(1884)年7月24日の讀賣新聞に日本鐵道がつぎのような広告を出している。

「避暑諸君の便宜を計り定時列車の外七月廿七日より當分左表の通り上野王子浦和間臨時列車差立候尤も風雨の節ハ差止め候義も可有之候事」

左表には上野発の下り列車3本、浦和発の上り列車3本が示されている⁸。

この年はEarnest Satow(アーネスト・サトウ)の“A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan”の改訂2版が発行された年であるが(初版は1881年)、軽井沢にはA.C. Shaw(ショウ)はまだ足を踏み入れていない⁹。ショウが軽井沢に別荘を建設(移設)したのは明治21(1888)年であり、日本人はそれより4年も前に「避暑」のために臨時列車を運行していたのである。明治32(1899)年の条約改正まで外国人は日本国内を旅行するのに旅行免状が必要であったのであり、避暑に出かける人数もごく僅かであったはずで、臨時列車が運行されるほど日本人が外国人の習慣を模倣したとは甚だ考えにくい。

2. 時系列区分による外国人宣教師と「避暑地」

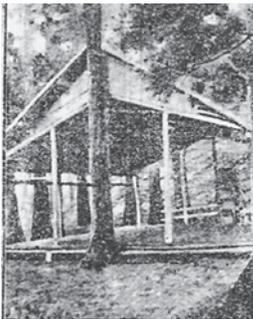
「上田2009」においては外国人宣教師によるリゾートが形成された「避暑地」として比叡山テント村、軽井沢、高山外人避暑地、野尻湖をあげたが、本稿では『あかしびとたち』の記述を参考にしつつ、日光、上高地・日本アルプスを加えることとした。

①日光：1873(明治6)年、ヘボン師(James C. Hepburn)：合衆国長老教会(The Presbyterian Church in the United States of America)、現USA長老教会(Presbyterian Church (U.S.A.))。1873年以前にも日光に來訪し、その際金谷善一郎に宿泊を依頼し、ために金谷は東照宮御番所を破門されたが、年次が明らかでないため、夏季長期滞在し、金谷に外国人に宿泊施設を提供するよう説いたとされる1873年を採用した。金谷眞一によれば、ヘボン師は「今後外国人が日光廟を慕って來ることと思う、特に涼しい日光に東京横浜の夏を避けて來る人が年々増して來ると思う、自分も來年は友人を連れて來るから室を出来るだけ多く提供し、家計の補いとしたら如何か。」と説き、その翌年パークス(Harry S. Parkes)英公使、バラ師(J. H. Ballagh)が來訪したとのことである¹⁰。

『あかしびとたち』によれば、ガーデナー師(J. M. Gardener、米國聖公會：The Episcopal Church in the U.S.A.)が「日光に初めて避暑に來た外国人、日光を外國へ紹介した人」¹¹となっているが、同師の記事には初來暁が「明治23年9月、宇都宮、日光

間の鉄道が開通する数年前」(下線、筆者、以下同様。開通は明治23年8月である。)とあるのを始め、「金屋旅館」(金谷)の「主人を説いて」(金谷善一郎が説得されたとは眞一は書いていない。)、「長男の眞一郎氏」(眞一である。)を「立教大学」(当時は学校。)に入学させた。「同氏は明治29年に卒業し」(家業を継ぐために中退。)、「日光金屋」(金谷)ホテルを創設(ホテルとしての創設は明治25年)した。同ホテルは箱根の富士屋ホテルとともに日本最初のホテルである。」(慶応3年の築地ホテル館が最初。)2頁余に9か所もの誤りがあり、信頼性に乏しい。ガーデナー師は日光真光教会の設計者である。金谷眞一が立教学校に学んだ縁か、金谷ホテルでは同教会での挙式ができるウェディングプランを提供している。

- ②比叡山テント村:1876(明治9)年、デヴィス師(Jerome D. Davis)、アメリカン・ボード(会衆派教会:Congregational Church)。同志社初の英語教師。同テント村の詳細については「上田2009」参照。なお、同地のレポート記事としては大阪朝日新聞、大正6(1917)年7月24日2面の「★比叡山の天幕村■■■■■訪問記」(婦人記者)を掲げたが、



(図1 禮拜堂)

その後東京朝日新聞、明治38(1905)年12月3日5面に「●叡山三日(八) 楚人冠 △外人避暑地」という記事を発見した。杉村楚人冠のレポート記事である。図1のようにデヴィス師記念礼拝堂も建てられていたようである(現在は跡形もない)。「辨慶邸の地に沿ひて十餘の木屋相列ぶ、半ば荒廢して人の住するなし、是毎年夏期外人の來りて、暑を避くる所なり、就て之を見るに郵便局あり教會堂あり運動場あり彼方に敗靴の轉がるあり此方に浴槽の毀れて倒れたるあり左ながらアレビアンナイト物語中の一王城址に似たり、聞説夏期外人の來り集まるや林中至る所天幕を張り笑語の聲山谷に響き依るに入れば燈火幾千點山腹に隱見し其賑しきこと言ふべからず或者は衛生部長を命ぜられて事ありげに上水下水を巡視し或者は文部大臣に推されてチャーレー、チックの徒が跳ね回るを監督し或者は庖厨に走り或者は山を下りて買出に急ぐなど別に好個の一天地を形づくり來る唯村民の此等外人に對する無情を極め事毎に暴利を貪らんとするが爲に近者漸く其數を減じて初の三百餘名今は僅に其半に過ぎざるに至れり現に彼の飲水引用の筧の如き優に二年を保たしめ得べきに拘はらず村民は年年之を新にして其工事費を博し得んことを欲するが故に彼等は毎年夏期に先ちて必ず此處に來りて細かに前年の筧を破壊し去るを常とす、我邦人の動もすれば攘夷的遺習に驅られて外人を窘めて得たりとするの風ある誠に歎ずるに堪へたり」

と杉村楚人冠は書いている。このような地元民批判は12年後の大正6(1917)年の記事にはまったく書かれ



(図2 テント村位置図¹²⁾)

ていない。外国人相手に暴利を貪ろうとした村民が京都側か滋賀県側かは明らかでないが、日用品の配達などは京都側から運んできたようである。

- ③軽井沢：1888（明治21）年、シヨウ師（Alexander C. Shaw）、英国国教会海外福音伝道協会（The Church of England, Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts 略称S.P.G.）。

軽井沢観光協会公式H.P.では「カナダ生まれの宣教師」とだけ記されているが誤解を招き易い表現である。派遣元はカナダではなく英国である。なお、英国国教会には2つの宣教団体があった。S.P.G.と英国聖公会宣教協会（Church Missionary Society 略称C.M.S.）である。

シヨウ師が軽井沢を訪れたのは布教の途中だったという¹³。最初の来訪は1885（明治18）年、もしくは1886（明治19）年と言われているが、偶然にその避暑地としての良さを発見した訳ではなく、前掲“A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan”に記された次の情報に依るところがあったのではないかと思われる¹⁴。

“Karuzawa may be said to be only two days’ journey from Yedo, now that the new road over the Usui pass is completed, as the whole distance may be done in a wheeled vehicle. The lofty situation, 3,270 ft. above the level of the sea, renders the climate very cool during the summer months, and the absence of mosquitoes is another recommendation in its favour as a place of retreat from the unhealthy heat of the plains. There are plenty of decent houses in the village where good accommodation can be had, and the surrounding country affords an innumerable variety of walks and mountain climbing. An uncultivated moor, covered with wild flowers in July and August, extends for miles in a southerly direction.”（下線部筆者）、

同Handbookにはこの時点でSando-ya（三度屋）、Tsuchi-ya（槌屋？）、Kame-ya（亀屋、後の万平ホテル）の名前が軽井沢の旅館として掲載されている。シヨウ師は1888（明治21）年5月に眺望に恵まれた大塚山に敷地を借り、追分宿にあった養蚕用の建物を買い求めて移築した¹⁵。『あかしびとたち』では、シヨウ師が「明治22年、軽井沢を避暑地として開発した¹⁶」とするが誤りで、移築は前年である。

初期の避暑地としての軽井沢について次のような記述があるが、極めて示唆に富んでいる。「すっかりさびれていた当時の軽井沢にはただ同然の価格で買える空き家はかなり多く、売る側は買い手が日本人であれ外国の人であれかまわず処分するというような有様だった。そして欧米からきていた宣教師や教育者にとって避暑とは今の日本人の多くがしたがるようなぜいたくなものではなく、心身の休養を意味していた。したがって粗末ではあっても廉価な家が売りに出ていることを知った外国人たちが、あいついで軽井沢に別荘を持つようになったのも当然といえる。明治23（1890）年には避暑滞在客の数は30人にもものぼり、外国人は年々ふえていった。この頃土地は一坪3銭から5銭、建築費は坪あたり5円か6円に過ぎず、200円ないし300円で別荘をつくることができ

た。そして建てられた別荘の大部分は板張りの簡素なものだった。¹⁷⁾

日本人が外国人の夏期休暇の過ごし方に影響を受けたとすれば、このつつまじやかさであって、それは当時の新聞記事からも推定できる。

讀賣新聞の明治24(1891)年7月22日3面には『新避暑地』と題して、「甲武鐵道開通以來西多摩郡の御嶽山及び八王子在高尾山へ避暑に出掛ける者多くなりしが本年ハ別して登山者多しとの事にて同山の氣候ハ東京より一ヶ月宛遅れ寒暖計も十度位ハ相違し居れりといふ」という記事が掲載されている。昨今外国人観光客にも人気の高い高尾山はこれより2年前の明治22(1889)年の甲武鐵道（現在の中央線、新宿・八王子間）の開通により、日本人にリゾートとして認識されたのである。

また、讀賣新聞は明治24(1891)年7月27日¹⁸⁾と8月3日¹⁹⁾の2回にわたり、『避暑案内』として避暑地を掲載している。内容は場所、交通案内、旅館が料金も含めて記されている。

7月27日が霧積温泉（長野県）、修善寺温泉（静岡県）、大山翠浪閣（神奈川県）、房州鴨川（千葉県）、妙義山（群馬県）、8月3日が榛名山（群馬県）、鎌先温泉（宮城県）、鹿野山（千葉県）、青根鉱泉（宮城県）、大宮公園（埼玉県）、五和村の潮鉱泉（静岡県）、飯坂温泉（福島県）である。

温泉が多いが、中でも静岡県五和村²⁰⁾の潮鉱泉については、「國民新聞ハ平民的避暑に適すと言ふ、蓋し適評なり、」としている。さらに、「宿料の点だけ御覧になれば本社の親切ハ通りましょう」と低料金であることを強調している。これらの「避暑地」を見ると、特に外国人が避暑に出かけたような場所ではなく、温泉も含まれ、当時の日本人の「避暑」に対する感覚をうかがい知ることができる。

- ④高山（宮城県宮城郡七ヶ浜町）：1888（明治21）年、シュネーダー師（David B. Sheneder）、ドイツ改革派教会（German Reformed Church in the United States）現 福音改革教会（The United Church of Christ in U.S.A.）。

「上田2009」で外国人宣教師たちが形成したリゾートとして初めて論文で詳しく紹介したが、それ以降当該リゾートに関する研究が上田以外に皆無であるのは嘆かわしい²¹⁾。この地を避暑地として見出したのはハレル、F. W. Harrellで、もともとは米国聖公会（The Episcopal Church in the U. S. A.）派遣の宣教医（眼科）であったが、辞任して仙台の第二高等中学校で英語教師となった²²⁾。身体を悪くした夫人の療養地を探しまわっていたところ、たまたま銃猟に来て高山が適地であることを発見したものである。相談を受けたのが友人の仙台神学校（後の東北学院）教授のシュネーダー師で、彼が七ヶ浜村と交渉してその一帯を借りたのが高山外人避暑地の始まりである。

「上田2009」では「昭和16(1941)年には日米間の国交が悪化したため、高山開墾合資会社から七ヶ浜村に対し、地上権および動産、不動産を売却する申し出があり、村は総額6万円（当時の年間予算5万円）で買収することとし、同年11月に仮契約、翌年

3月に本契約を締結した。ところが、敗戦後の昭和26(1951)年、連合軍最高司令部の民間財産管理局(CPC)が当該契約は日米両国が交戦状態にあった時に成立したもので、「欺瞞強迫によらぬ行為」であることを立証できないとし、日本政府に対し、セヶ浜村が高山開墾合資会社より買収した全ての財産を返還する命令を出した。これを受けた大蔵大臣池田勇人の命令書により、財産の返還と962年9ヶ月余の地上権設定が命ぜられた。登記簿によれば、昭和26(1951)年12月17日付で地上権の設定がなされている。」と記したのであるが、地上権の買い戻しの当時の状況を示す文書が見つかったので紹介しておきたい。国立公文書館つくば分館に保管されている『外国人ノ財産等ニ関スル調査 第一編米国 第三章米国系本邦法人 其ノ一(第四卷)』²³、昭和16年9月で、「地上権ノ設定セラレタル位置ハ(中略)東ハ太平洋ニ面シ眺望極メテ良ク北ハ鹽釜港ノ咽喉ヲ扼シ居レルノミナラズ其ノ北方ニハ海軍、南方ニハ陸軍ノ航空隊ヲ夫々控ヘ且同隊ノ演習ノ中心地ト爲リ居レル等國防上極メテ樞要ノ地ナリ 然ルニ同地ハ日支事變勃發後特ニ我邦ノ樞軸國側ニ参加スルノ決意ガ鮮明ニセラル、ニ從ヒ容疑外國人(米國人)ノ策動基地トナリタル爲並ニ日米親善等ノ假面ノ下ニ九九九年ノ地上権ヲ許シタル村民ハ其ノ欺瞞ニ憤激シ之ヲ國辱的存在ナリトシ之ガ回収ヲ圖ル爲同村内有志相諮リ最初三五、〇〇〇圓其ノ後五〇、〇〇〇圓ニテ右地上権ノ買戻シヲ會社側ヘ申出タリ(後略)」

要するに高山の外国人住民をスパイと疑って追い出そうとしたのである。戦前は地元民との交流も盛んであった。しかしながら、戦後の土地返還からの軋轢で交流はあまりなかったが、東日本大震災以来交流が行われているようである。数年前に初めて日本人が住民となったと聞いている。



(図3 高山の住宅²⁴)

なお、同文書で判明した昭和16(1941)年当時の高山外人避暑地の住居戸数は33戸、ほとんどが木羽葺で9戸のみが「亜鉛葺」となっている。恐らくトタン葺であったと思われる。図3の一部瓦葺は戦後のものであろう。

- ⑤上高地・日本アルプス：1896(明治29)年²⁵、ウェストン師(Walter Weston)、英国聖公会(The Church of England S.P.G.)、ハミルトン師(Heber J. Hamilton、カナダ聖公会(The Anglican Church of Canada))。

アイオンH.A.は、「ウェストンは最初神戸で活動していたが、後には英国人協会の牧師として横浜で働く傍ら、そこを訪れる外国人船員にも伝道した。しかし日本人への伝道に直接関わったことはなかった。(中略)ウェストンは、西洋の一個人として日本に新しいスポーツを誕生させたという点で、極めてユニークな存在であると言える。²⁶」とし、「1915年5月に英国山岳登山家の草分けの一人、王立地理学協会会長であるダグラス・フ

開墾合資会社が設立され、翌大正10(1921)年から別荘建設が始まった。高山開墾合資会社と同様の名称であるが、機能はやや異なる。高山の場合は地上権の設定による別荘建設であるのに対し、野尻湖では土地所有権付き別荘建設を目的としており、外国人による土地取得が不可能であったことから、設立当初から日本人を社員として登記している。当初は外国人のみのコミュニティーが形成されていた³⁵が、第二次世界大戦を機に日本人が権利を譲渡されるようになり、現在は外国人と日本人の比率は7：3となっている。野尻湖国際村に関する文献は多くが軽井沢脱出の理由を、「エリート気取りの、堅苦しい風習が広がっていく軽井沢に嫌気がさした」とするが、「上田2009」で述べたように軽井沢の「避暑地価格」という物価上昇の問題がネックになったと考えるのが自然であろう。特に第一次世界大戦中および大戦後のドイツ不況を考えればドイツ人が生活費の低廉な野尻湖畔に移住を希望し、実践したと考えるのが妥当と思われる。



(図5 別荘から俯瞰した野尻湖³⁶)

湖を利用したプールでは米国のライフセーバーの資格が取得できる。ヨットも盛んであり、テニスコートは4面、図6のような9ホールのゴルフコースがある。村長制度と



(図6 ゴルフコース³⁷)

自治組織N.L.A.(野尻湖協会)により運営されている。村民(土地建物の使用権者)になるためには推薦者2名が必要で各種ボランティア活動を経験するなどの試練期間と厳しい面接がある。村内には建築家W.M.ヴォーリス設計の建物が何棟もあるとのことであるが詳細は不明である。建築史の観点から調査研究すれば良い成果が得られることと思われる。

3. まとめと今後の課題

外国人宣教師による日本国内のリゾート形成についてまとめた前稿「上田2009」から10年が経過した。この間機会に恵まれて野尻湖国際村を2回、高山外国人避暑地を1回訪れることができ、関係書類の閲覧、建物等の写真撮影・現地での聞き取りなどから前稿を充実させる資料が得られた。また、高山外国人避暑地に関しても太平洋戦争直前の国による調査資料を発見し、比叡山のテント村についても杉村楚人冠のレポートを発見することができた。本稿では「上田2009」以後に得られた資料を盛り込むだけでなく、「上田2009」では欠落していた外国人宣教師の所属する宗派(教会)に着目して彼等の形成したリゾートを見直してみることにした。

日本近代社会の形成においてキリスト教が与えた影響は極めて大である。にもかかわら

ず明治の初期に日光を訪れたのが「宣教師ヘボン」であったり、軽井沢に別荘を初めて移築したのが「カナダ人宣教師ショウ」では、現在の観光学があまりにも日本近代キリスト教史に疎いことを露呈しており、その点を明確にしてみようと考えたのがその理由である。結果としてリゾート形成に関わったのはすべてプロテスタントの諸派であることが明らかになった。

上記2.①で金谷善一郎に説いて日光に外国人宿泊施設を作らせたヘボン師は、その他の事蹟でも高名なのではあるが、米国長老教会から派遣されていたことを記した資料は未見である。日光真光教会を建て、そこに眠るガーデナー師が米国聖公会からの派遣であることは『あかしびとたち』を読んで明らかになった。

今回新たに明治初期のリゾートとしての日光とスポーツ・リゾートもしくは山岳リゾートとして上高地・日本アルプスを加えたがそこにもプロテスタントの足跡があった。毎年上高地を始め各地で行われる「ウェストン祭」は有名ではあるが、彼が英国聖公会（国教会）から派遣された宣教師であったことはまったく取り上げられないことがない。また、上記2.⑤におけるハミルトン師やタッカー師は若い頃からカナダや合衆国でキャンプや登山を行っていたことも明らかになっている。

本稿を書く上で、日本聖公会による『あかしびとたち』は非常に役に立った。しかしながら、上記2.①におけるガーデナー師の記述に見られるように誤りも多く³⁸、かつ根拠となる資料が一切示されていないので、いささか信頼性に欠けるものと言わざるをえない。

今後の研究課題としては第二次大戦中にいわゆる「敵性外国人」の軟禁場所として使われた軽井沢や野尻湖についての詳細をまとめてみたいと考える。

(註)

- 1 参考文献 (1) 「第二次世界大戦以前の日本のリゾート (外人避暑地) について」
- 2 参考文献 (2)、「『日本聖公会百年史』の続編とも言うべき人物史」と序文に記されている。
- 3 1108年頃成立。参考文献 (3)
- 4 参考文献 (3)、 p.341
- 5 1213～1221頃成立。
- 6 参考文献 (4)、 p.48
- 7 この他の文献史料については参考文献 (1) 「上田2009」 pp.91-92を参照のこと。
- 8 P.4 広告頁、上下とも午前1本、午後2本となっている。
- 9 明治18年とも19年とも言われている。
- 10 参考文献 (5)、 pp.9-10
- 11 参考文献 (2) 『あかしびとたち』 pp.248-250
- 12 参考文献 (6)、 p.80
- 13 参考文献 (7)、 pp.258-263
- 14 庄田元男は『明治日本旅行案内』、平凡社、1996の中巻p.378で断定しているが、疑わしい。
- 15 参考文献 (6)、 p.261
- 16 参考文献 (2) 『あかしびとたち』 p.12
- 17 参考文献 (7)、 pp.261-262
- 18 附録2面

- 19 3面
- 20 「ごかむら」、現島田市五和温泉。現在は日曜のみ入浴可能である。
- 21 上田は河合正二と共著で2012に参考文献(8)を執筆。
- 22 参考文献(9)、p.130では明治20年9月帰国となっている。参考文献(10)、p.258によると同年9月に野球用具を持ってきて生徒に教え、これが宮城県のベースボールの嚆矢だとある。
- 23 主管は大蔵省国有財産局総務課となっている。
- 24 2013年2月、現地で上田撮影。
- 25 最初の滞日、1888～1894に日本アルプスの山々に登頂しているが、1896に“Mountaineering and Exploration in The Japanese Alps”(邦訳『日本アルプスの登山と探検』)を上梓しているの、この年次を採用した。
- 26 参考文献(11)、pp.26-27
- 27 参考文献(11)、p.27
- 28 参考文献(2)『あかしびとたち』p.126
- 29 大蓮華岳(白馬岳)登頂の折りはハミルトン師は急病で、蓮華温泉で待機していた。当該4岳中、御岳についてのみ外国人初登頂の記述がない。
- 30 参考文献(12)、p.293
- 31 参考文献(2)『あかしびとたち』p.128
- 32 参考文献(2)『あかしびとたち』p.289
- 33 参考文献(13)、pp.265-269
- 34 N.L.A.(野尻湖協会)資料による。図左下が野尻湖である。
- 35 ノルマン師はこれに反対して、野尻湖に住むことは無かった。
- 36 2012年8月、現地で上田撮影。
- 37 2012年8月、現地で上田撮影。
- 38 タッカー師が後のタッカー夫人と知り合ったのが浅間山であるとしているが、それより以前に会ったことが参考文献(13)に記されている。

(参考文献)

- (1) 上田卓爾「第二次世界大戦以前の日本のリゾート(外人避暑地)について」、名古屋外国語大学現代国際学部紀要第5号、2009
- (2) 日本聖公会歴史編集委員会編『あかしびとたち—日本聖公会人物史』、日本聖公会出版事業部、1974
- (3) 大江匡房談・藤原実兼筆。黒川眞道編、『国史叢書 古事談・続古事談・江談抄』国史研究会、1914
- (4) 日本古典文学大系27『宇治拾遺物語』、岩波書店、1960
- (5) 金谷眞一『ホテルと共に七拾五年』、金谷ホテル株式会社、1954
- (6) 鐵道省編『日本案内記 近畿編上』、博文館、1932
- (7) 富田仁編『日本の「創造力」 近代・現代を開花させた四七〇人』第15巻、日本放送出版協会、1994
- (8) 上田卓爾・河合正二「『高山』・『野尻湖』等、日本国内における外国人避暑地の経営にあたる『開墾合資会社』の発生および法的側面について」、金沢星稜大学総合研究所年報、2012
- (9) 元田作之進『日本基督教の黎明(老監督ウイリアムス伝記)』、立教出版会、1970
- (10) 『宮城縣史18』、宮城縣史刊行会、1959
- (11) アイオンH.A.「十字架の喜びと苦難：外国人宣教師が日本に与えた影響に関する三つの事例研究」、『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』30巻、2005
- (12) Walter Weston, “Mountaineering and Exploration in The Japanese Alps”, John Murray, 1896
- (13) Justin Glenn, “The Washingtons A Family History”, Savas Beatie, 2015